

# 佛 教 研 究

第七卷 第四號

## 禁慾主義と人間性

鈴 木 大 拙

禁慾主義と云ふのは、英語の *asceticism*、獨語の *Askese* を、普通に和譯したのである。原語の本来の意味は、希臘語の訓練又は鍛鍊を云ふことであると、字典に載つて居る。希臘では體育が旺んであつたので、今日の日本の運動家の如く、随分練習をやつたものと見ゆる。而して此練習のことを *asko* と云ふた、*asceticism* はこれから導き出されたのだ。それ故禁慾主義と譯するより、訓練主義の方が原意に近い、が、アスセテイズムと云ふと、今日では禁慾主義と云ふことになつて仕舞つた。邦語は原語の意を譯したものと見てよい。

肉體を鍛鍊して、筋骨稜々たる運動家を作り上げる如くに、靈性を陶冶して至聖の域に到らんとするのが、禁慾主義本来の名實の起源である。それ故禁慾は、主義と云ふよりも、もどく方法で

あつたのだ。即ち聖境の實現に必要な方法として、五慾を抑制し、或はそれから自由ならんとするため、アステイックになつたのである。それが何時しか禁慾そのことが、聖的生涯のやうに見なされて來た。併しこれには又さうなるべき理由がある。

とに角、發達した宗教には何れも禁慾主義が行はれて居る。五官の欲望を勝手に満足させて行く處に、宗教の本旨が實現されると云ふ宗教はないのである。なるほど、印度の或る宗教、及び基督教史の中にも、欲望の自由な開放を以て宗教の極致となすものもあるにはある、が、それは始のから此主義で通るのでなくて、一種の訓練を経てからの話なのである。もし此主義を始めから眞向に鼓吹するなら、人間は何れもその本能において拘束を受けたくないと言ふ傾向があるから、別に放縱を「主義」とするにも及ばぬのである。「主義」と云はれるまでには、その裏に何かを豫想してかゝつて居るのである。

禁慾を始めから標榜しない宗教で、それがその發達の最初に、此主義を實行し出すやうになつたと云ふのは、不思議にも感ぜられやう。基督の教訓には何にも禁慾主義の跡方がないやうである。なるほど、基督はユダヤ教徒のうちでも、エセニヤと云ふ宗派に屬して居たと云ふことであり、又沙漠に四十餘日を過ごしたと云ひ、又その教に、財産を捨てること、親族に背くことなどもあるが、その宗旨の主義として禁慾を主張したことはないやうだ。只近づく天國の用意に、今までの罪を悔

ひ改め、正しきに還るべきを教へた。

基督教は、その實、保羅教だとも云はれるほどに、基督教の大成に大きな貢献をした保羅も、禁慾主義を唱道して居ない。結婚しない生涯の方がよいとは言ふが、その中には必ずしも禁慾を主義とした意味はない。

基督教の禁慾主義は埃及に萌へ出して歐洲へ移つた。小亞細亞に發生した基督教が、地中海の南岸に傳へられてから、三百年ほどの間に、禁慾主義を土臺にした僧院生活の制度が自然に出来上つた。その開祖とも云はるべきは埃及人であつた。保羅聖者と安頓アントニ以聖者の二人を基督教における禁慾實行者の人と見てよいことである。保羅聖者と云ふのは、バイブルに出て居る使徒保羅と違ふことは勿論であるが、此聖者は西記三百年前後に埃及の砂漠中で修行した人である。傳記ははつきり分明でない。ゼローム聖者の書いた此人の傳記と云ふものは、批判的でないからさまざまの傳説が織り込まれて居るものと思はれる。

アントニ聖者の方が、前者ほどに神話的でないらしい。此聖者が沙漠で魔物に惱まされて居る繪はよく美術館や古い歴史の本で見るところである。此人の方がより有名である。

話が脇途へはいるが、佛教者にも面白いと思ふ傳説が兩聖者の間に存在して居る、それを紹介する。ポールはその當時百十三歳でアントニは九十歳である。ア聖は、何かわけのわからぬ姿をし

た動物に導かれて沙漠中のポ聖の庵を訪づれる。途中は飛鳥の如くに翔けて行く。不思議な動物にまた出會ふ、その實はこれは動物でなくて、異敎の邪執に囚われた人間であつたことである。愈々ポ聖の庵、否、巖穴に近づくと、牝狼が一疋居へ案内する。ア聖は怖るゝ進んで行くこと前途に一條の光が見ゆる。これなんポ聖の居處と思へば、胸もおどろに、足も忙はしく進む。ふと石に躓いて憂然と響く。浮世の雜音に驚きたるか、隱者は突然と岩の戸を鎖す、押せども開かぬ。ア聖歎じて曰ふ。「動物の近付を許す聖者は、何とて人間の己れを拒み給ふや」と。この一言で心動きたるか、ア聖のために戸は開かれる。互に平安の接吻を交はしてから、ポ聖云ふ「近頃人類の消息は如何。舊都には新しき人々の繁殖し行くか。如何なる政治が今世に行はれるか。まだ惡魔のために迷はさるべき人間は、幾人も残つて居るか」。如何にも浮世離れた諸問である。夕食になつたら、何處ともなく一羽の鴉が飛んで來て、二人分の食物を兩聖者の前に置いて行つた。ポ聖は此鳥により養はるゝこと今に六十年と云ふことである。

ポ聖は此珍客をしてアタナシヤス聖者の着物を早くもたらし來れと命じた。それはポ聖が自らの死期の近けるを知りて、その死骸を包むための着物である。ア聖は此において韋駄天走りに自坊へ戻り、弟子等が氣づかわしげに何かと尋ねるのには、耳をも傾けず、所用の品物をとりて、又鳥の如く飛んでポ聖の岩穴に到れば、仙魂既に空し、只遙かに白衣の老僧が天人達に誘はれて、遠く天

際に到るを見る。ア聖は止むを得ずボ聖の殘骸を衣に包みて何處かに埋めんとすれど、鉞もなければ、シャベルもない。途方にくれて居ると、何處から現はれたるか、二足の獅子、己が面前に跳り出で来る。一時はぞつととして怖れをなしたが、一念神に向へば、獅子も鳩の如くに思ひなされた。何を爲るのかと見て居れば、二足の猛獸は、ボ聖のなきがらの前に跪き、高く聲を上げて叫んだ。彼等にとりてはその心の悲しみを言ひ現はさん術は、實にこれより外ないのである。それから二足の獅子は、前足で砂をかきわけ／＼と、遂に人體を埋め得るほどの深さにした。そしてア聖が徐かに最後の祝福を祈り了へるまで、獅子はそこを立ち退かなかつた。

人間の世界を離れて、山や沙漠に隠れる人々も、絶対に孤獨の生活を営み能はぬ。何かの生物がその御相手をする。雀や鴉でなければ、猿か虎か獅子か、乃至は蛇なども、聖者の身邊に近より来る。或る點では人間よりも動物の方が便りになる。單純な心持で居るから、一但その伴侶となる、いつまでも御供して来る。人間愛の満足が此で出来る。そんなら聖者は何故に山へはいつて、人間のなかへ出ぬか、人間も愛の對象になるではないか。隱者の「獨坐靜處」を慕ふのに二つ事因がある。一は他の詐り多きを厭ふのである、今一は自らの詐りに陥り易きを恐れるのである。つゞめて言へば、詐りを嫌ふの心が聖者をして沙漠に埋もれ、山谷に老いさしめるのだ。

それは、どに角として、アントニイ聖者は、又佛教の聖者のやうに、人里を次から次へと離れて

自然の懐深くに遁れ去つた。「郢人那得苦追尋」と云ふた大梅和尚の心持そのまゝである。Entsagen sollst du, sollst entsagen, das ist der ewige Gesang. と云ふが、此に人間性の矛盾の一片が閃めく。To be is not to be, that is the question! である。捨てんか、捨てざらんか、永劫に迷ひつゝ、永劫にあこがれ行くのが人間ではなからうか。一足／＼と山奥に進んで行く、その足跡には、明らかに「人の世戀し」の文字が讀めるではないか。こゝに悲劇もあれば、喜劇もある。禁慾主義は悲劇である。

印度教や佛教における禁慾主義の例は、いづれも吾等の知悉して居るところであるから、略する。禁慾主義の傾向をしらべると、否定の一句に盡くる。何を否定すると云ふと、存在そのものを否定するのである。終局は自殺に至りてその主義の最も徹底した實現を見る。ところが禁慾者が自殺をしないで、苦しみもがきながら、その否定の生活を續けて行くのは何の理由によるか。此に禁慾主義が深き人間性の表現であることを見るのである。

禁慾主義の否定はまづ自己の否定から始まる。衣食住の程度を最低限にする。食べるものは一碗の飯にも充たぬ、飲むは水のみ、着るものは木の皮か、毛物の皮か、縑縷の類、而して住むところは岩穴か、樹の下か、庵と云ふてもソロソロ風の簡易を極めた草屋。こゝに角、生が維持してさへ行けばよいと云ふ程度で生活する。

次ぎには社會生活を否定する。「在<sub>二</sub>寂靜處<sub>一</sub>獨坐思惟」することが、佛教徒でも基督教徒でも、禁慾主義者の主張し實行したところである。「市人は惡魔の徒で、靈の聲は沙漠でないと聞かれぬ」と云ふ。monk と云ふ字は、もとく孤獨の義を含んで居る。Philistine (比丘) は乞食の義である。佛教は貧と賤とを主とし、基督教は孤居を尊んだと見わる。何れにしても社會的生活の否定だ。

それから禁慾者は生物學を否定する。彼等は獨身主義で、人類繁殖に反對する。此反對は、經濟上家族が支持出來ぬからとか、家族の繫累は足手纏ひだとか云ふ理由によるものでなくて、結婚生活、即ち性慾を基調とした生活は不純であると云ふのである。それ故、此反對は人生の本能そのものに對しての挑戦である、單に力の經濟など云ふ便宜から出たのではない。學者などが自分の研究に餘念なくして、普通人間の生活に遠ざかつたのと違ふ、主義として妻帯を否定するのである。此に禁慾主義が手段でなくして、純粹の意義における主義であることが判かると思ふ。

存在否定は、一方においては、人間性の否定を意味する。併し禁慾主義は始めから二元論の立場に居るから、否定の一方には肯定を有つて居る。それで自殺主義に轉化せぬ。二元論と云ふは、靈と肉、神と人、聖と凡、彼岸と此岸、純一と雜多、社會と個人、束縛強制と解放自由、かういふ對立である。此對立の一項を倒して他の一項を守り立つるところに、禁慾主義の原則がある。併し禁慾主義は始めから此原則を自覺して出發したものでない。始めは心の訓練手段として禁慾をやつた

のが、何時の間にか手段即目的に轉じて、禁慾そのことが宗教生活の極致となつたのである。禁慾生活の内容中、最も重要な一項につきて、これが人間性の矛盾を如何にも剝切に暴露して居る所以を尋ねて見る。

性慾と宗教とほどに關係の甚深なものはない。一部の心理學者は人間生活の基調を性慾の中におかんとする、又宗教さへも性慾の昇華であると云はれる。是等の學說を討議するのが、此文の目的でないから止めるが、とに角、性慾の否定、即ち是れ宗教生活と云はれるやうになつて居ることは歴史上の事實である。人間と惡魔との戦ひは此に在ると見られる。而して女人は惡魔の化生と考へられるやうになつた。佛教でも基督教でも女人卑下の理由は此に根ざすのである。

或る意味で言へば、女は生物學的原理の具體化である。これを宗教者の言葉で表はすと、女は男を迷はすと云ふことになる。生存競争の結果、割合に知性の發達した男子が、自分の地位を反省してくると、どうも女が邪魔になることがある。知性の明徹さが女によりて昏くなりがちだ。そこで、いつも自分の本能から分離せんとする知性が、性慾に向つて謀叛を起すのも止むを得ない。佛戒の中には、女犯を如何にも重く見て、種々の譬を引いて、その徒をして持戒せしめんと努力する。基督教においても亦然りである。左の傳説を見よ。

ある基督教徒の考によると、此世における惡事は悉く魔黨一味の所爲で、神の關知しないことであ



る、魔王はいつも一隊の小魔を人間界に派遣して、機を見ては、禍事を發生せしめる。或るとき一人の小魔、大王の前に出でて陳して曰ふ、「私しはこゝ三十日の間に所々で戦争を起させ、反逆を醸成し、多くの人の血を流させました、何かお褒美に預りたい」と。大王大に叱して曰ふ、「馬鹿云々な。なせもつと殺傷事を起させなかつた」と、乃ち此小魔を打擲した。次ぎにまた様々の惡魔ども出で來りて、「われは、船を沈めました」、「われは大荒しを起しました」、「われは婚姻の筈に喧嘩を出かしました」など、それ／＼自分等の教唆した凶變につきて誇り顔に申し立てた。が、大王は依然として、尙その凶惡の不充分なりしを責めて、魔類を激勵した。ところが、最後に一人あり、報じて云ふ、「わたくしは、四十年の間、沙漠に居ました、相手は一人の僧モンクです、ところが、今夜と云ふ今夜は彼を導きて姦淫を犯させました」と。大王これをき、直ちに其坐を起ち、此小魔を抱き上げ、おのれの王座を分ち與へた。そして曰はく、「此の如き短時間において此の如き偉大なる功績を揚げ得るとは思はなかつた。モンクの墮落ほどに、わが心を喜ばすものはないのだ。寔に天下の最大快事だ」と。

性慾と云ふところで、人間性の二元、即ち矛盾が、最も銳角的な尖點に中るのである。外にも様々の矛盾があるが、何れも此尖點に集中して居るとも考へらるのである。それ故、二元論を豫想して居る禁慾主義はその主力を性慾本能の壓抑に注ぐのである。存在否定と云ふことも、此に至りて明

瞭になる。人類の相續がなかつたら、宗教も、眞理も、神も、惡魔も、一網打盡的に、皆空となるではないか。角を矯めて牛を殺すやうなものだ。否、禁慾主義は、寄生虫が繁殖しすぎて、その母體をも殺し去ると同様に、魔を斃し得たとき、自分も斃れ了る。

併し考へて見ると、自然界に人間と云ふものゝ出たのが、矛盾の始まり。意識が可能となつて、反省と云ふものをやるやうになつて、宇宙の一元性は、完全に破壊せられた、少なくともその進轉に一頓挫を來たした、今までのやうに遮二無二的でなくなつた。一大進轉の途上にあるものを悉く踏みにぢると云ふことが出來なくなつた。一寸の躊躇が大破綻の基となつた。是からは神様も人間に相談してからでないで自分の仕事も思ふやうにやれぬ。人間性と云ふやつが、神様を扶けもし、損いもするやうになつた。そこで宇宙は矛盾の活劇場。

禁慾主義は矛盾に始まつて矛盾に終る。併しこれが人間性の常だ。そこで吾等には永遠の悩みがある。又永遠のあこがれがある。あこがれて悩み、悩んであこがれる。一元から二元又は多元、還つてまたもとの一元。

禁慾主義の場合においては、併しながら、これを目的と見ないで、そのもとよりの性質、即ち宗教生活を實現する一個の方法なるものと見れば、此主義の中に含まれて居る矛盾性は、自ら解決して行く。人間性と自然界の理法との間に懸濠がある限りは、人間生活の最高表現である宗教の上に

も、何等か抵抗の打ち克つべきものがあり、障碍の拂ひ退くべきものがある。自然的生活の中に根を下した諸本能、諸衝動に對しては、何かの訓練を加へて、向上のあこがれに一步なりとも近づき進まなくてはならぬ。あこがれを其まゝに眺めるとき、そこに一種の美感は生せんも、宗教には尙進一步の境地がなくてはならぬと思ふ。

禁慾主義は二元論によりて裏づけられては居るが、二元論をそのまゝに肯定するものでない。一元論の實現に努力するものである。これがその理想とするところ。此主義そのものを目的とするところに、多くの矛盾と缺陷を見るが、これを以て或る一元論に到達する方法、又は努力と考へるとき、今日の思想界に此主義の大いに歓迎すべきものなるを覺ゆる。

畢竟するに、禁慾主義の目的とする所は、人の心に根を下した夫れ々の本能が、只各自の欲求を肯定するに急にして、却て人心そのものを破壊せんとする矛盾から脱がれんとするに在る。極端に行つたがため、手段が目的になつて、却つて當初の目的を忘れた、が、一たびその錯誤に氣づけば、此主義から深き宗教生活の端緒がひらけるのである。孤獨の生涯を營まんとするのは、名と權力との欲から自由にならんとする努力である。貧と賤とに安すんせんとするのは、所有の欲を遠離して、更に向上の生活あることを知らんとするのである。獨身無妻の境地に居らんとするのは、性慾の本質に徹底して、廣く人類愛の實現を期せんとするに外ならぬ。性慾の花は愛を實のるための自

然の方便であつた。愛が個人から出て、異性の上に及び、更にそれから發展して、すべての人に加はり、宇宙全體をも包擁するときに、性慾の終極の意味がある。これを實地に自覺し、體驗するには、一時の方法として、禁慾主義も必要な時代がある。歴史としても、個人としても、其必要の時代があることを、わすれてはならぬ。

諸々の本能が、何かの理想、何か向上のあこがれによりて統制せらるゝとき、それらの意義を發揮する。今時において此意義を自覺させる捷徑は、或は禁慾主義に由らなければならぬかも知れぬ。人間性に深く根ざして居る矛盾から出現した禁慾主義も、此の如くに考察せらるゝとき、どうやら解決するやうに思へる。